

[学会] 第22回千葉県胆膵研究会

日 時 : 平成13年6月30日(土) 14:00~18:00

場 所 : ホテルニューツカモト

1. 出生前診断された先天性胆道拡張症の3例

大塚恭寛, 吉田英生, 松永正訓
幸地克憲, 岡田忠雄, 斎藤 武
武之内史子, 大沼直躬
(千大院・小児外科)

1997年以降, 当科では出生前診断された先天性胆道拡張症を3例経験した。全例女児で, 在胎22から30週に胎児超音波検査にて腹腔内嚢胞の存在を診断され, 日齢2から20に当科に入院した。これら3例に対し, それぞれ早期一期的根治術・胆汁外ドレナージ後の待機的根治術・待機的一期的根治術, という異なる治療方針をもって臨んだ。その結果, 早期一期的根治術では, 利点として1-cyst型胆道閉鎖症との鑑別および嚢腫剥離操作の容易さが, 欠点として吻合操作の困難さが挙げられた。一方, 胆汁外ドレナージ後の待機的根治術では, 利点として高度黄疸・胆管炎・哺乳不良例などに対する根治術前の全身状態の改善が得られる点が, 欠点として嚢腫剥離操作の困難さ, ドレーン留置に関わる合併症が挙げられた。いずれの方針を選択するかは, 各症例の病態に応じて慎重に決定する必要がある。

2. 総胆管閉塞をきたした悪性リンパ腫の1例

幸地克憲, 吉田英生, 松永正訓
大塚恭寛, 岡田忠雄, 斎藤 武
武之内史子, 大沼直躬
(千大院・小児外科)

患児は, 2歳, 男児で, 主訴は, 腹痛であった。1ヶ月前より右側腹部痛が出現し, その後増強し, 近医受診した。症状軽快がみられないことより, 当科紹介となった。血液検査上, GOT 337 IU/l, GPT 386 IU/l, LDH 980 IU/l, T-Bil 2.6mg/dl, D-Bil 2.1mg/dlと肝機能異常を認めた。入院時超音波で, 総胆管は, 径5mmと軽度拡張を呈していた。ERCP上, 総胆管は, 胆管中部で途絶していた。入院後黄疸が徐々に進行する為, PTCDを施行した。造影上, 左右の肝管は交通が無く, 肝門部付近で狭窄が認められたため, 左右肝管にカテーテルを挿入した。更なる精査の為, MRIを施行した。MRI上, 肝門部から, 左右グリーンに及ぶ,

T1 low, T2ややhighのregionがバタフライ状に広がっており, 悪性リンパ腫のリンパ管浸潤をはじめて疑った。翌日, 骨髄穿刺を行い, B cell lymphomaの診断となった。翌日より, 化学療法を開始し, 入院後63日の造影で, 総胆管閉塞が解除したため, カテーテルを抜去した。

3. 総胆管結石症を合併した肝外門脈閉塞症の1例

栗山 裕, 川村健児, 光永哲也
(松戸市立・小児外科)

一次的肝外門脈閉塞症(EHO)の胆石合併症の報告は稀である。症例は13歳女児。7歳時に下血しEHOと診断され, 以後食道静脈瘤に対しEVLを数回施行した。本年4月(13歳時)に黄疸が出現。腹部超音波, CTにより, 胆嚢・総胆管・肝内結石症と診断し, 手術を施行した。胆管全周のcavernomatous transformationからの出血のため, 総胆管切開は不可能で, 胆嚢摘出と十二指腸乳頭形成を行い, 胆道鏡により総胆管切石した。総胆管下部は細く, 内腔に発生した静脈瘤により狭窄していた。現在ESWLによる肝内結石の治療中である。胆石の成因は, 求肝性側副血行路の増生により, 肝外胆管外圧迫, 胆管内静脈瘤, 肝外胆管形成がおこり, 胆管狭窄による胆汁うっ滞, 結石形成をきたしたと考えられる。

4. 肝移植の適応となった胆道閉鎖症例の臨床的検討

志村福子, 東本恭幸, 朝川貴博
岩井 潤, 江東孝夫
(千葉県こども・外科)
堀江 弘 (同・病理)

本年6月までに肝移植の適用となった胆道閉鎖症6例に対し, 臨床的検討をおこなった。病型はすべてⅢbで, 生後60日以降に初回葛西手術を施行したものが4例であった。6例中, 4例は非代償性肝硬変のため移植を施行済みで, 2例生存, 2例は死亡した。2例は待機中で, 1例は反復性重症胆管炎, 1例は治療困難な静脈瘤を理由に移植適応となった。4例中3例が1歳未満で移植をおこなっているが, 術前特に全身状態の悪かった2例は移植後死亡し, より早い段階で移植を考慮すべきであったと考えられた。